

分散会報告（要旨）

第一分散会

第一日目は信行会の現状報告と問題点、第二日目は組織づくりについてを中心に、それぞれ活発な討議が展開された。参加者二十三名。

(1) 信行会の現状報告

参加者各寺院での事例が発表され、一般的に行なわれている読経・唱題・法話の形以外では、次のような内容で信行会活動が進められていた。

①法座 体験発表を中心にして信仰を深め、悩みなどの問題を解決していくもので、寺院や信徒宅で月に三十回近く行ない、住職の指導のもと、信徒が企画、運営している。よりよい企画作りのために、立正佼成会などへも出かけて情報を収集。病気や生活上の悩みが解決した人へは、恩返しのために参加するよう指導し、護持会費

も家単位ではなく、個人単位で納めている。

②まとい保存会 半分以上が檀信徒以外の青年で構成され、初めはまとい練習だけだったが、練習後にお自我偈の太鼓練習をするようになってから青年会、信行会的に発展しつつあり、人生相談の場にもなっている。

また、子供達はまといによって各寺院、檀信徒から感謝される喜びを知り、自然に合掌、唱題するようになった。但し、やはり信行中心に運営するのは難しい。

③読経練習会 青年からの希望で始まり、月二回開催。信行だけでは運営が難しいと感じ、リクリエーションも組み入れるようになった。今では境内整備などの奉仕行にも参加してくれるようになった。

④親子信行会 幼稚園児から中学生までと、その親を混じえての信行会。読経・唱題行・法話の外に、幻灯を上映。

⑤誠録 信行会内容の一つとして行なっているもので、懺悔の文章を書かせ、相談に応じる。人は皆、懺悔しようとする心を持っているので、外面的な行ないと共に、

内面的な心の考え（ねたみ・嫉妬等）を書くことによって建て前と本音を知り、面談によって心奥にある苦悩の解決を指導していく。

⑥ 家族の安全を祈り合う集い 交通安全等を祈願する参加者の多くが女性や老人に限られがちな点を解消するには、名称にも問題があると考え、尊神会としていた会を表記のように変更。家族全員で参詣するように発表した。

(2) 問題とその解決

現状報告は、同時に多くの悩みや失敗例など、問題点の報告でもあり、その場で助言者や参加者から適切なアドバイスも得られた。問題点とその解決のためのアドバイスを共に記すと、次のようであった。

① マンネリ化 ○ 会員の固定化を防ぐ意味でも、家族ぐるみの信仰をすすめ、親↓子↓孫と伝えるようにする。○ 胎教から出産、初参り、そして死まで……というように、一生にわたる催し物を考えて、内容を豊富にする。

② 組織づくり ○ 「会」という形を先ずつくりうとし

ても成功しない。求める者、求めるところがあつて、自然に会ができていく。急がないで、自然発生するようにした方が成功するといえよう。○ 茶道・華道などの文化的活動から始めるのも一方法ではないか。信仰以外にも寺院へ足を向けさせることになり、信行会結成の機運になる。但し、信仰以外で人を集めても、信仰や宗教色を出すと人は離れがちになってくるので、内容の組み合わせの工夫が大事である。

③ 会員増と減少への対策 ○ 檀信徒数や、寺院への距離などは会員数とは余り関係なく、教師の信仰・熱意が一番の問題である。寺院の使命は信行会の場合であり、教えを生かし、人作りの場とするべきである。靈感のある教師の寺院は会員も多いが、教学を信行に生かして会員増と結びつけるよう、研究する必要がある。○ 寺院側から勧誘するだけではなく、檀信徒どうしで呼びかけ、誘い合つて参加させるようにしたほうが効果的。○ 法座も、人数が集まり過ぎると意味が薄くなるので、工夫を要する。○ 老人や女性が多いという問題の解消には、会の名

称を変えるのも効果ある。○人数の多少よりは、集まってくる年代のほうが問題ではないか。家族構成を先ず知り、若い年代を参加させるようにすると、子供も来るようになる。家庭内暴力が問題になっているが、親が徳を積む善行を見せると、子供のよい教育となり、家庭問題は消えていく。○教師・寺院婦人の人柄で人が集まる面もある。笑顔と優しさ、暖かい心、愛情が大事である。

④会員相互の和 老人と青年の断絶が見られることがあるので、例えば太鼓の打ち方を老人が青年に教えるとか、リクリエーションなどを通じて、両者の交流を図ることが必要。

⑤他宗会員への教化 まず、その人の宗旨の經典を通して、六波羅蜜の実践をすすめ、その後に法華經の救いという点にまで高めるようにすると、教化が実る。教化は教えっぱなしではなく、考え方、行ないが変わったとか、利益があったと自覚させるまでにしなければ意味がない。

⑥テキスト・資料 自ら作成したものが一番よく、他

のものはあくまで参考的である。また、教化センターの充実も促進すべきである。しかし、参加して仏性を開くようにするとか、救われることが大事なポイントで、テキスト等は第二の問題ではないか。

⑦社会福祉活動 一般青年を集めやすいという意見と、寺院で行なうのではなく、外へ出て社会の中に溶けこんで行なうべきではないか、との両者の意見が出された。

⑧教化の場としての認識 茶話会で終わりがちになる場合もあるが、救い、信仰の喜びを得られるよう、教化の場として認識する必要がある。

(3) 組織づくり

(1)(2)と重複する内容も多いが、第二日目は「だれにでもできる信行会づくり」の討議のうち、主としてこれから組織づくりをするについての注意点等が話し合われた。

①基本は個々とのつながり 組織をつくっても大事な点は、教師と信徒個々との信仰的つながり、結び付きである。そのために人生相談等を積極的に行なうべきである。

その際、先方の求めに応じて家相・方位・九星なども方

便として用いてもよいはずで、それらを勉強し、まとめて信徒に配っておいてはどうか。否定しては信徒も来なくなってしまうだろう。例えば癌などの病気のこともあつても、それらを用いて相談に乗り、さらに祈ると共に来世にその業を持っていかないよう、善業を積む行ないを勧め、最終的には「法」に拠ることを教示する。まず形から入り、心の問題に入っていくといえるだろう。このようにして個々とのつながりを深めることが大事である。また、教師の人柄、ふん囲気によつて人が集まる面もある。「信仰は嫌いだが、お上人が好きなので参詣します」という人がある。だから教師の笑顔、立ち居振る舞いも教化であり、信徒とのつながりの大きな要素となる。

② 家族ぐるみの信仰へ マンネリ化を防いだり、信仰を継ぐという意味でも必要であるが、さらには信仰への見方が親と子では異なるので、家族全員が信仰してこそ、教化が満足する。よくあるように一家の年寄りも熱心なようであつても、若い家族の信仰に対する見方・考え方は異なることがあるからである。人間は自然界にいるのだから、自然の木に譬えること、根は親であり、幹・枝葉は子供であつて、子供が偉くなったとしても、根である親に栄養―孝養を施さなければ、その木全体が枯れてしまふと話し、家族全体の信仰へと導く。これはいわば、組織づくりをする前の土台となる部分で、土台づくりを先にする考えが必要といえよう。

③ 本音を聞きわけける 信仰を始めるとか、人生相談に来るといふ人は、悩み・苦しみから逃れたいということだけから、訪れてくることが多い。そのような人は自己を正当化しがちであり、本音を見極めてこそ本當の教化となり、人も集まつてくる。建て前だけの部分で終つては、信徒として定着しないのではないか。

④ 青年への教化 悩みのないような青年の教化は最も難しいといえるが、奉仕行・布施行をする信徒青年のグループに入れると、「こんな素晴らしい世界もあるものか」と洗脳され、奉仕することに励み、喜び、感謝の心を持つようになる。また悩みのないような人へ、自身の持つている罪障を気付かせることも教化の一つであり、本人

自身が気付くよう、教師は優しく、暖かく接していく態度がなければならぬ。

⑤副住職の役割り 副住職は行動力があり、檀信徒も話し易いという点から、寺院への要望や苦情を副住職に話しがちである。そこから住職を差し置いて考え・行ないが出るようになって、葛藤も生まれてくる。しかし根である住職を無視しては寺も立枯れとなって壊われてしまうといえるから、副住職にとつて苦しくつらい時もあるが、住職を常に立ててこそ寺院・信行会の発展につながるかと考えるべきではないだろうか。住職をいつも立てながら、副住職は大いに行動していくと、その姿に信徒はついてくる。住職も副住職に命令するというのではなく、相談する姿勢があれば円満にいく。

以上が討議の要点といえるものである。最後に座長・助言者から以下のようにまとめられた。信行会は形をつくろうとして始めても成功しない。懸命に教化活動を続けるうちに、自然発生的に信徒が集まるようになる。そして何を求め、何を悩んでいるかを見極め、喜び、救い

を与えていかなければ、マンネリ化し、人数は減少していくであろう。故に教師はみ仏の心を与え続けていかなければならない。また、教師の人格・振る舞いも教化上に大きな影響があり、檀信徒等にとつて人間としての見本となるべきである。単位寺院信行会の充実こそ、信徒が結集することであり、宗門の発展につながっていく。教化学の面で宗門は立ち遅れており、教研などで大いに交流し、教化センターに集約させて、その資料を配布できるといえる。

(山口裕光)

第二分散会

第二分散会は、参加者全員(十三名)の自己紹介のあと、助言三師の問題提起から始まった。

石井錬昭師は、住職が仏教をひろめるのは限度があり、坊さんを助けることのできるリーダーが必要である、と提起し、次のように具体例をあげた。

① 檀信徒研修道場修了者七十数名が、管区で信行会の母体となっている。

② 寺同士でグループをつくり、どこかへ行けば必ず法話が聞けるという形にして、寺同士の競争心をおこさせている。

③ 唱題行と一時間法話と懇談が信行会の内容だが、坊さんの話したことは半分もわかってもらえない。

④ 坊さんが直接に信行会員を引っぱることはできにくい。会員が会員を引っぱるよう工夫をするのが、坊さんである。

⑤ ひとつのことは五年も持たないので、少しずつかえていく必要がある。

⑥ 会費は一回二百円で、リーダー（先達）が集める。

⑦ 問題点は、テキストがない、集まりがわるい、マンネリ化している、若い人が集まらない、という点があげられる。

新井貫厚師は、地域社会のなかでの信行会が可能か、という問いかけから、次のように提起した。

① 自坊で題目講を始めたが、横のつながりに問題があって人数が減った。しかしそれ以上は減らなかつた。檀信徒のなかの檀信徒という自信だろう。

② 題目講の利点は、講員が互いに相談できる、寺に対する理解と協力が得られる、熱心な講員を他がまねるようになる、ということである。

③ 信行会での法話はあまり効果が期待できない。それよりも人生相談的なカウンセラーのほうが必要ではないか。いつでも悩みを相談できることがひろまって、地域社会にとけ込めるのではないか。

④ 若い年代の信行会が必要である。
新聞智照師は、自坊信行会の内容を、次のように紹介した。

① 統一信行を十二年つづけ、修了証を出している。

② 信行必携・ご遺文（三大部）・僧風林読本の学習と読誦行・唱題行を行なう。

③ 平和祈念法要が、信徒の自主的要望で唱題のつどいとなった。

④ 八年間法華經講座を行ない、その後ご遺文講座を行なっている。

⑤ 六委員会制で運営している。広報委員会では、月刊教化誌を発行している。

以下、討論に入ってからのお話を順に列記する。

○ 檀信徒と素直につきあうのがいいことはわかってい
るが、坊さんは忙しすぎる。

○ 家庭・児童問題は、親が変わらなければいけない。

親への信行指導が大切だ。

○ 寺の仕事を手伝ってもらおうよう、寺から声をかける。

自分が行ってやんなきゃ寺がこまる、と思わせる。

愛着を持ってもらう。仕事してもらおうのも教化の

テクニクである。

○ ノイローゼの人には、信行会への勧誘はなじまない。

個人的にやるしかない。

信行会の会費については、

○ 参加のたびに百円としている。七面講から明神講にかえ、参加者にいろいろふるまいを工夫し、お堂の

修理費や、暮れの記念品代に遣えるほどの残高がある。

○ 志を各自でおいてくれるが、もうかりも損もしていない。

○ 十二月講の会費年額二千円を会計が取り扱い、住職はノートタッチである。

○ 信行会は同好の士のつどいであるから、費用は受益者負担である。近隣五カ寺でテレフォン説教を行な

い、その支援者を一口千円で六百人あつめ、五年間で百万円残った。五百万円までためて、教化センタ

ー設立の基にしたい。行動をおこせば、必ず有形無形の反応がある。

信行会そのものについては、

○ 若い人をひっぱるには、まず理論を教える。四十歳の信徒で親衛隊十人をつくれれば、その人がつぎの信徒をつれてくるようになる。

○ 税金を取られない財産づくりは人づくりである、という法華クラブの経営方針には学ぶべきものがある。

法華クラブで育った人がお寺に行った時に失望するのではないか、ということがこわい。

○岡山管内十二カ寺の連合護持会が信行会を行ない、テレフォン説教を宗務所に設置している。

○静岡県清水市では、寺と在家の三百人で構成する役員連合会がある。研修・団参・開宗会などを行なうが、住職主導のためマンネリ化してきている。

○東京北部や愛知県三河、北海道西部でも、広域信行活動が行なわれている。

○大部分の信行会では寺と檀信徒の関係は密になるが、横のつながりはどうか。もつと自立した信行会にする研究が必要である。新興宗教は、これで伸びた。

○法要にあわせた経本を自前でつくり、用いている。
○リーダー養成は、先達の資質が問題となる。給仕第一でない、頭でっかちの居士になる。法華クラブでは、給仕第一を強く教えている。

○師厳道尊を、階級としてとらえているくらいがある。日蓮聖人の教えを行なっている人が師匠であり、筋

の通っていることが大切だ。

分散会第二日目は、信行会の中味を具体的に考えることから始まった。

○寺の名がついた信行会には、未信徒が来ない。住職は指導し、運営は信徒にまかせる。

○通知は、毎月出して呼びかける。

○学校連絡網方式を用い、役員から次々に連絡させる。ただし、人と人との好悪があるので気をつける。

○行衣をつけさせること、着ていることの自覚が生ずる、他へのアピールがある、仲間意識ができる、誇りがもてる。

○横のつながりをうまくできないのが既成宗団である。気心の知れることで、たのしみができる。

○電話で呼びつけたら出かけてくる「ラーメン屋」坊主や、葬儀屋にやとわれているようなのがいる。このはじめは、檀信徒に必ずつけさせる。

○慢心の檀家が菩提寺住職をとりあわず、他の寺へ行って何でもするので困った。講の世話人が動けなく

なったとたん、講活動が頓挫してしまって困った。

○マンネリの最大原因は、なかよし会にある。「霊山のちぎり」のような信仰契約が必要になってくると思う。

○信行会のなかに法華経・お題目・ご遺文が欠落しているから、何かの問題が生ずる。教師の資質の向上が必要である。

経験交流をしないと個々の取り組みの限界から出られない、という点から、教化センターの必要性が語られた。

○坊さんと檀信徒の必要なものを、センターが中継点となつて交流して学ぶ。

○宗務所から独立している三重のやり方以外にいろいろな設立のしかたがあり、センターの名称を用いないやり方もある。

○行政が教化の必要性を認めなければ、いくら言ってもすまない。

参加者から最後に一言づつ求めた発言の代表的なものは、次の通りであった。

○よくお参りするが、家庭では決しているいいお婆さんではない、というのでは困る。足が地につかない信行ではいけない。

○家庭のみだれと心の平安を考えねば、信仰に結びつかない。

○年寄り「後生願い」の固まる時期なのに、未信徒にすすめてもなかなか来ない。かりに来てもらっても、その人に読んでもらう本がない。

○やる気のない住職のいる寺がいちばん問題で、早急な対策が望まれる。

○信行と社会活動は一見別のようだが、本来別のものではない。

○檀家だけの寺ではない。地域のなかで役割をはたすお寺がこれからは考えられる。

一カ寺一信行会の必要性、そのための経験交流の場としての教化センターづくり、教師の資質向上の問題が、「生き生きとした信行会活動のあり方について語り」あう第一段階として語りあわれた。

明年にその成果を持ちよってほしい、と座長が締めくくって分散会を終えた。

(伊藤立教)

第三分散会

第三分散会は、太田鳳苑師の座長により十六名の参加で行なわれ、討議内容は第一日目に、1、「日常活動と信行会について」として、名称、運営費、教材、参加者は何を求めているか、どのように導くか、を紹介、報告していただき、2、「信行会づくりと生き生きとした活動」として、マンネリ化の問題、運営方法、活性化について討議を深めた。第二日目は、3、「地域社会とのつながり―ボランティアなど」、4、「だれにでもできる信行会づくり」の順で話し合われた。

1、日常活動と信行会について

①会の名称

十六名の参加者から報告された会の名称の総数は三十

五件、十八種類である。そのうち題目講・婦人部・盛運祈願祭が各三件、十二日講が二件あり、一カ寺で複数の会を主催している様子がうかがえる。

発言内容及びその回数から見ると、お題目講に関するものが八回と一番多く、唱題修行が信行会活動の中心とされているようであるが、その他、信行に関するさまざまなグループ活動が信行会にかかわるものと見られている。

信行会 婦人部 青年部 少年部 題目講 報恩会
同信会 一日会 七日講 八日例祭 十二日講 常師
会 鬼子母神講 子安講 盛運祈願祭 和讃講 華の
会 蓮の会

その他のグループ活動では、講の代表者のつどい・団参・月まいり・信行会の各種活動(ボランティア・清掃奉仕・カラオケ会など)・飲食店女性従業者の会・厄年の女性の会など多岐にわたる。

②運営費

月額三百円、四百円、五百円

年額二千円、五千円

お供え喜捨のみ

住職負担で布施収入より支弁

護持会費より負担——三例あり

お供え喜捨の額には、月額二千円から、十五万円までのひらきがある。一般には、会費制が望まれている。

③教材

信行必携 日蓮宗聖典 日蓮宗新聞

法話 教化の友 ニュース 新聞のコラム

宗教誌 身延山の教箋 水子供養和讃

信行必携・日蓮宗聖典・日蓮宗新聞・教師の法話を教

材としてあげた人が二人づつあり、信行会の活動は、唱

題修行とともに、法華経御遺文の習学を中心として行な

われていると見られる。

一方で、身近なニュースや話題、通仏教的な知識が必

要とされている。

中央からの資料やニュースは、地方での活動に役立つように、地方のしきたりや伝統を考慮したローカルな肉

づけをして流してほしい旨の要望があった。

④参加者は何を求めているのか

読誦唱題家庭での信仰のあり方(婦人層) 現代の信仰

(青年層)

ボランティア 学校教育以外のこと

御利益(家内安全・身体健全・息災延命)

他人の平和 非日常性 余暇の善用・レクリエーション

雑談 相互扶助

四苦八苦を恐れぬ精神力 勉強

人生相談 リーダーシップ 仲間意識

宗祖のおしえ 心のやすらぎ 霊証

ストレスの解消

悩みの解消を直接間接に求めている人が多く、ついで

持てる能力を奉仕活動等の中で発揮することを期待して

いる人が多い。

⑤どのように導くか

唱題修行・法華経御遺文の習学を信行会活動の中心として
している教師の側と、参加者側とは、意識に差がある

と見られるが、伝道宗門づくりを目ざす教師と、御利益信仰との接点であるとの指摘があつた。以下は、発言内容の要旨である。

○参加者が、御利益を第一に求める傾向の是否については、宗教の一側面であるという点から見て、こだわる必要はない。

○大衆が、唱題によつていかに救われるかが大切であり、その為の寺であるべき。

○教師は、有形無形のものを用意して、そのつながりを重視して檀信徒に提供し、月まいり修行を勧め、安心（無形のもの）を獲得してもらおう。有形のもの、教材、多種多量の祈禱札、会食など。法華経に中心が定まれば、信行方法には遅速いろいろある。

○檀信徒には、平等大慧のこころ「親切に、親切に」で接している。

○他の宗旨に比較して、日蓮宗ほどまず初めに世界の安穩を祈つて、それから自分の願いを祈る宗教は他にないと言われるように、本宗には特徴がある。自

利他円満の菩薩行の実践を説きつづける教師の姿勢が大切である。「世界全体が平和にならなければ、個人の平和はあり得ない」と、法話の最後をしめくくる。

信行会は、寺の護持・経営のためにあるのではなく、純粋な信仰から、教師と檀信徒が共に悩み、現実の解決を求めて求道する交流の場であり、総弘通を目ざす菩薩行実践の場である、との結論を得た。

2、信行会づくりと生き生きとした活動

①マンネリ化の問題

一般的に、「寺ばなれはしているが、宗教ばなれはしていない」ということができるように、マンネリ化の原因は、教師の姿勢、自覚のあり方にあるのではないかといいることが、厳しく問われた。

会員の老齢化、参加者数の伸び悩み、会員の中に特権意識がわいて派閥ができてしまう弊害など、活動を衰退させてしまう共通の悩みが話し合われたが、第三分散会では、むしろこのような現状を打開していった成功例・

経験談が数多く報告された。

②運営方法

○開会の日を定めている。

○会則を定める。

○月に一回開催の例が多い。

○土曜日の夜七時から開く等の工夫をする。

○都会では昼間、農村部では夜間となる。夜間では、

テレビのゴールデンアワーを避ける工夫もある。

○勤行に法話を織り交ぜた四時間位の月まいりを行なっている。

○当番制をとり入れ、香華・供養・荘厳をつとめても

らう。会食の準備も寺族がすべてするのではなく、

当番で、台所を寺族と信行会に二つに分けて好結果。

○会員の中にリーダー格の者ができて特権意識を持つ

ようになつたり、派閥のようになつてしまい易く、

求めるところにも差がでて来るので時間帯を分けて

しまう。

○会員の夫人・家族もメンバーとして招く。

○会長・副会長を人望のある人に決めて、幹事・書記等も住職が依嘱する。住職は会員となる。

○寺族が所作仏事に徹して、行事に参加するとよい。

住職夫人を中心としたグループ活動も親しみをもた

れてよい。夫人は、信徒側の代弁者、教師のよきア

ドバイサー。夫人を教化できる人は誰をも教化でき

る、と言われる。

○新興宗教の集会のあり方を参考にする。

③活性化

○読誦会・題目講の中で必ず法話をして、座談会をする。

○教学を身につけて、話す時は平易にする。田中智学

に学ぶ。

○御題目を、南無（ありがとう）妙法（不思議だな）蓮華

（人生の花を咲かせて）経（今日ゆるぎもせず）と説明

している。

○通仏教的な知識を必要とする。

○教師は誠実さの中に、好かれること、ユーモアがあ

り、時にくだけること、檀信徒に溶け込むこと、人

を集めるアイデアを持ち、雰囲気・魅力づくりの興

味づけができること。例として、福引き・カラオケ・

ホームバーなど。厄年の女性によびかけて、その組

織化に成功し、若年層の入信布教に効果があった。

寺に來ない人、離れた人、遠方の人に、個々に好み

を考えた便りを出し、活動に参加するチャンスを作

る。案内状を工夫する。

○オピニオンリーダーを作る。信者、サービス業者の

口コミなど。

○何か功績があった者を、日蓮宗としてうまくほめて

欲しい。バッチ・旗などを授ける。

○企業が得意先きを獲得する熱意と努力が教師にも必

要。二十五等以下の寺院に、活発な教化活動を行な

っている例が多い。

○公共機関の代表者（署長、館長、議員など）に講演し

てもらい、教師が教義で結論づけてしめくくる。

○地域社会とつながりを持ち、教化活動の場を拡大し

てゆく。

3、地域社会とのつながりーボランティアなど

教師と地域社会とのかわりあいは、社会教化という

点で重要であるという確認は、全員の一致するところで

あった。

発言者それぞれの社会教化事業としてのとり組み方は、

布教形態、得手不得手によって、その分野はさまざま

ある。なかでも公共役職（民生委員・保護司・教誨師な

ど）、社会教育活動（子ども会・各種スポーツクラブ・文化ク

ラブなど）、奉仕活動（ボランティア）に関するものが多

い。兼業していた専門職（教師、カウンセラー、ソーシャル

ワーカー）が布教に役立った例もある。

社会教化活動を信行会が主催しているもの、また一方

で、教師が活動を起してゆく中で組織が生まれ、布教の

場となっている例等、流動的である。

社会の求めに応ずる活動の中に、地域社会全体を信徒

としてゆく「ひき入れる努力」と、本宗教師としての姿

勢が明確でないと、ボランティア活動等は決して信行会

活動にはつながらない、という厳しい反省もあった。

○ いろいろな公共役職を進んで引き受けるようにして
いて、寺務以外の仕事をする人が多い。宗教
観を、オブラートで包むようにして話しかけたこと
で布教の効果が上がり、O・B会ができた。高所か
らではなく、人類に奉仕する気持ちで教師自らが踏
み込んでゆくこと（常不軽菩薩）が大切。

○ 教師個人ですることには、能力において限界がある
が、団体に入り公的なものを利用することによって
布教活動の範囲を広げている。団体員として、平等
感を持ち、平易な言葉で布教にあたっている（国際ラ
イオンズクラブ員として）。

○ 近郊で、寺が主催して青少年のために、飯ごう炊飯の
会を、ボランティアの人々の支援でひらいた。茶碗
作り、ロクロまわしを専門家に指導してもらったと
ころ、企画・運営が好評であった（青少年育成国民会
議の経験より）。

○ あきカンひろい、清掃奉仕、のど自慢大会、地域に

ある講の指導。

○ 信徒会館を利用する、趣味文化サークルの人々との
親しい交際を通して、信行会活動への参加を呼びか
けている。

4、だれにでもできる信行会づくり

○ 教化のチャンスと方法はいろいろある。

○ 教師が檀信徒と共に悩み、ともに道を求める者とし
ての理解を深める中で、活動をはじめるとよい。

○ 今ある檀徒に「信行会を作りたいのですが」と率直
にもちかける。

○ 住職の同窓生五人で発起人会を作り、会食しながら
話し合っではじまった。

○ 通仏教的なテーマから活動をはじめると、若年層が
なじみやすい。

○ 数多くある聖日、伝統行事を活動にあてる。

○ 地方性に合った方法

しめくくり、檀信徒拡張のむずかしさについて、話
し合われた。いわゆる中流意識の中にあって、宗教に関

心を持たない、悩みを持たない階層の人々に、どのように布教を展開するのが、課題となった。

永続性のあるしあわせとは何かを明らかにする、本質的な問いかけが必要であり、若い人々は、テレビ・マスコミが発達した情報化社会の中で、遊びの要素に心をとめ、何かを持つてかえろうといった、受益率を問題視する行動をとる、といった傾向がある。

このような時代性に合わせた信行会、手だての事例交流と、目をひきつけ、寺に足を向けさせる教師の熱意・連帯感の確認が、第三分散会の話し合いの特徴であった。

(蓮見高純)

第四分散会

まず参加者全員、自己紹介を兼ねて、それぞれが自坊で行っている信行会活動の現況を報告した。信行会活動は、いずれにおいても行われていることが明らかとなったが、名称も異なり、運営の仕方や形態においても、多種

多様である。寺院中心の組織もあれば、講中心で寺は協力する形のものもある。一カ寺のみのものもあれば、数カ寺協同で運営するものもある。また内容においても、学を中心とする講義形式のもの、行を中心とした唱題行・読誦形式のもの、祈禱会形式のもの、あるいはこれらを複合させたもの等、各寺・各地方の事情の中で生み出されたものだけに、一様ではない。従って組織づくりも、呼びかけも様々であった。

ここで、信行活動・布教活動は信行会づくりだけではない。唱題行にしても形だけでは意味をもたない、これを意味あるものとして伝えるための教師の勉強態度こそが重要である、との発言があった。これは出席者全員の意見を代弁するものであろう。

運営については、会費制によるものがほとんどで、一部に寺会計により賄うとするものもあったが、いずれも護持会とは別個のものとしている。ほかに献金制として、参加者各自が適宜に箱に納めるものもあった。

教材については、信行必携・法華経大講座・僧風林読

本等々種々のテキストがあげられたが、これら既製のものを終えてしまい、御遺文のコピーあるいは独自にこしらえる例もあった。この自作の場合は、自身の勉強になるところが大きく、責任感もたかまり、また話にも熱がはいるなど利点があげられる。さらに、テキストとは他に求めるべきものではなく、教師自身が、身の周りすべてに注意を払い、新聞でも雑誌でもこれらを教材として、創りあげていく態度が大切だとの意見が出された。

ここで、具体例に即した話の重要性が認識され、今後のテキストは、御遺文や法華経の解説が中心となっていくが、今に生きる教学・仏教を説くことこそわれわれの役目があり、人の関心がある以上、世情・社会に即したテキストづくりがなされねばならない。老人問題・尊厳死・校内暴力・親子・家庭等々、現代社会に内包された問題について、個々人のなすべき解決への道を示唆するべく、法華経・御遺文に教示されている解決策を手引きするテキストの必要性が確認され、今後つくられるテキストは、これに応ずるものにしてほしいとの要望が出さ

れた。

信行活動において、住職一人がすべて面倒をみていくことは、困難なことであるし、また参加者にとつても、受身の姿勢から抜け出せないことになる。従つて信行会自体がある程度自立して活動できることが大切なことで、そういった意味においても、檀信徒の中にリーダーを置くことは必要であるとの意見の一致をみた。

これに關しての成功例が報告された。日頃お寺に来る人をビックアップし、地区の支部長として、行事の連絡等、住職の手足となつて働いてもらつてゐる。この人たちは支部長となることにより、一層積極的になり、また檀信徒と住職との意志の疎通もでき、信行会が活発化してきたり、また他に、事務局を作り運営事務一切を任せることにより、仲間意識と積極性が出、自己研鑽に励む姿勢が生まれてきた。そのほか数例の報告があつたが、いずれもリーダーを置くことにより活動が活発になつていくことが確かめられた。

そこで次には、リーダーの人選と育成について討議さ

れた。新興宗教から入ってきた人はリーダーシップに優れ、即戦力を備えておりおいに活用している、との成功例。布教師養成講座へ送り育成している寺院もある。

しかし一方では、問題となる点も指摘された。列挙すると、(1)リーダー候補者が複数いて、そのうちから一人選ぶ場合の問題、(2)リーダーの役割の範囲、(3)リーダーとなることによって起こる信仰面での低下。

(1)はこちらを立てればあちらが立たずといった問題で、結果において活動が鈍化する可能性がある。

(2)はリーダーの先走りが問題となる。事例によると、古くからあった信行会のあり方にあき足らず、更に新しい信行会ができたケースがある。結果的には内容を異にする二種の信行会が併存することとなって、新局面が展開されたわけだが、リーダーに委ねられる範囲は限定されるべきだとの意見となった。しかしこれに対しては、全面的に任せて成功した例も報告されている。

(3)では、リーダー・世話人になったことにより、檀信徒の間で特権意識をふりかざし、信行会自体が沈滞して

しまう弊害が指摘された。これに関連する事例として、熱心な人で中には信行道場にまで行ったが、出て来てからは、宗門関係の裏話に興味がいってしまったり、いわゆるタクズった話に夢中になったりで、肝心の信仰面で低下してしまう人。また研修道場へ送ったところが、エリート意識を強く持ち、増上慢的存在になってしまうケースなどが報告された。

以上、リーダーについては、その必要性を認めると同時に、マイナスの面も十分に見極めることが要求されるもので、この点からも、われわれ教師自身が、他の力を頼ることなく教化、指導すること、教師自身がまずリーダーとなって引張っていく姿勢を崩さないことが大切であると、再認識された。

信行会活動の根本にかかわる問題として認識された上で、教師としてのわれわれは、檀信徒の要求に、どこまで応えるべきかに焦点が当てられた。

信行会に参加する人は大別して、(1)現実の悩みをもつており、その解決を目的としている人、(2)お経や教学を

知りたいと思つて参加する人、の二種にならう。しかし(1)に属する人が圧倒的に多いといえよう。

では、現実の悩みは信行会活動の中で、はたして解決できるものであらうか。事例の中に、教義面の研修活動だけでは信徒の要求には十分応ずることができないため、修法活動によつてこれを補なつてゐる、との発言もあつた。せつぱつまつた悩みを抱いて寺へ来る人を、導く中に布教があるとの意見が出たが、全員の一致する見解であつた。

そこで次に、その要求にどのように応えるべきかが問題となつた。これに対する回答のひとつに、現実の悩みがいかなるものでも、これに対処し解決へと導くことが、教師の勤めであり、信行会活動もこのような方向に進めていくべきだ、との意見があつた。しかし価値観が多様化している現代社会において、僧侶はオールマイティであつて、はたして、あらゆる悩みを解決し得るものなのであらうか。またその必要があるのだろうか。

この点に関して、出席者いづれも、オールマイティと

なることを理想としてゐるが、ただ現実においては、われわれの限界を越えた問題も多々あり、結果的には、直接手を貸して問題を解決する場合と、精神的に力づけてやる場合の二種の方策があるとして、意見の一致をみた。そして、様々な悩みを抱いて来る人々に可能な限り解決を与え、できないところは弁護士や医者などの専門家の知恵を借りる等可能な範囲で援助もし、教師自身悩みを分かち合う態度をもつ。信行会活動もここを出発点として、共に悩み、共に力づけあう人々の場として発展させていくことが望ましい、との結論を得た。

マンネリ化に関しては、出席者いづれも、これについての悩みを持つ人はなく、個々人の変化はあつても会自体の変化はない。むしろ毎日のくり返しの中に、新しい感激を見出す喜びを持たせるよう指導することが大切であるとの見解に至つた。

その他、信行会活動における問題点としては、後継者が育たない悩みがあげられた。青年会が実状は老年会となつてゐるなどの例があつたが、若い人が集まる場にすべ

く、カラオケなどのレクリエーション的要素を加える方策が述べられた。ただし、行きすぎると弊害が出るもので、最も有効な解決策としては、家族ぐるみでの信行会に発展させていくことが望ましいと論ぜられた。一例として、親子団参、家族そろつての唱題行などの成功例があった。

また都会寺院における騒音問題、引越しによる定着性なき信徒の教化、社会奉仕活動にともなう法的責任の問題等々、今後の研究の課題があげられた。ただ社会教化については、いわゆるボランティア活動のみが社会教化活動ではなく、伝統的な寒行なども、一般社会人に与える影響は大きく、これらも合わせて考えねばならないとの指摘があった。

なお、信行会活動の持続という点について、檀信徒研修会が、管区・教区、身延山研修道場等で開かれているが、これと各寺の信行会の関わり、またこれらを出た人の受入れ態勢はどのようにあるべきか、リーダー育成の問題とも関連して、今後の課題として問われた。

最後に、教化センターについては、名称・機構は異っても、各地において重要な機能を果たすものとして、今後積極的に討議すべきであるとされた。

(植田観樹)

第五分散会

自己紹介を兼ねた現況報告により、参加十数名中、独自又は合同で信行会をしている教師は約三割、講中・婦人会等信行会以外の名称で何らかの集まりを組織している教師を含めると八、九割に達した。

それらは信行会として発足したもの他、題目講等、及びそれらを発展させたもの、青年・子供・婦人の会、剣道などのスポーツの会、写経会、勉強会等、種々の目的・性別・年代別の組織で、成立過程も、既存の組織の継承の他、住職の発起、檀信徒の要望で成立したものなど様々である。

活動内容は、読経・唱題・法話の典型的な組合せの他、

御遺文拝読・写経・勤行作法等の研修会や勉強会、日常生活や信仰に関する座談会、実行等で、法話などの内容は宗祖・法華経を中心とする他に、他宗の人や、他家の家から来たお嫁さん達のために、通仏教的なところから説いてゆく例もあり、大体一、二時間位。この外婦人会で清掃、ボランティア、バザー等の社会奉仕。青年会・子供会では、娯楽などと組合せて信行が行なわれている。剣道の会では、夏休みの合宿が大きな教化の機会とのこと。

教材は経本の外、信行必携や独自のプリントなどで、とくに使用しない例も多いようである。

場所と日時は、寺を会場として毎月一〜三回位、日を決めて、昼や夜に行なう場合と、檀信徒宅を順番に会場として、主に夜に催す場合とがあつた。後者の場合、自分の家に大勢きてもらったのだから、他家にも出席しなければという事で、集まりがよいということだった。

以上が参加各師の報告の概要であるが、それぞれに、成立・運営等に苦勞があり、内容のマンネリ化防止や会

員の老令化等の問題で苦心している。しかし、苦勞の中にも、個々人の信仰・知識・認識の向上・増進に伴い、お寺や住職に対する理解が養われ、檀信徒としての自覚が生まれて、建築事業がスムーズにゆくことや、寺や宗門の行事に積極的に参加する等の成果が報告され、信行会等の組織が個々の寺院の結末・発展のため、そして宗門の足固めのためにも有効であることが確認された。

これらの苦心談等をもとに、信行会等の組織作りの方法・注意点・提案等をまとめてみると、まず、その成立に当つては、教師の熱意による発起、はつきりとしたビジョンと、面倒な事でもやり抜くという信念が必要であるということ。実現しやすさから言えば、教師の特性(特技・趣味などを含む)を生かし、地域の地理・風習等の条件に合わせて、既存の講など、すでにあるものを生かして発展させてゆく等、できるところから始めるということである。

次に、たとえ少数でも、それを受けとめてくれる檀信徒の存在が条件である。

赴任した寺で、檀徒との面識もないままに仏教講演会を催し、参加者が一人もなかった失敗から、寺を草ひとつなく管理し、月経つきぎよなどを利用して家々を訪ね話し合うことにより、親しみと理解を得て成功したという実例が語られている。

いかにして仏の教えを広めてゆくか、命の大切さを教え、人間のあり方を教えるか、個々の人格を高め、社会に向ける目を養い、仏国土を建設してゆく大きな目を養ってゆくか、これは、各教師の基礎仏教学から現代社会の把握、認識等の研鑽に裏打ちされた信仰から出てくる熱意と明確な方針が不可欠であり、これによつて、たとえば一人の寒行が平和大行進に発展してゆくことも可能なのだ、という意見が出されたが、最初の「いかに」の中に、話を聴いて、受けとめてくれる檀信徒の存在が、先ず不可欠なのだということである。

このために個々の教師の「受けとめてくれる檀信徒」養成の努力も大切だがその後の檀信徒の中核となるリーダーを長年月にわたり養成しつづけることも含めて、宗

務所単位で合同の信行会を年一回くらい実施したならば、全国的な信行の統一にもつながるし良いのではないかと
いう提案も出た。

教材も、方針がはっきりしていて、来る人々が何を求めているかの接点を求める努力をすれば自然と決まってくるという指摘がなされた。

教材作りはなかなか手間がかかるので、という声も多かったが、手間暇かかることをしてゆくの布教の原点であるという意見も出て、努力が必要なようである。

基本的には、はじめは平易なものからということ、宮沢賢治の童話を基に法華経の教えを説いている例や、文書を読むのを嫌う傾向を捉えて、スライド等を用いる方法、座談会を日常生活の不満の発散の場として、そこで出た問題を生きた教材として話し合つてゆくという例も報告された。

また日蓮宗内にみられる独善・排他をやめ、通仏教を方便としてゆこうという意見も出た。

その他、道具として団扇太鼓を用い、信行会や寒行な

どで他宗徒など抵抗のある者には、唱題抜きで太鼓のみたたかせている例もあった。

運営上の問題としては、マンネリ化を防ぐため、又、現代の勘定高い、割り切り主義の若者らを参加させる方便としても、何か先へ希望・目標を持たせ、魅力のあるものにする方法を考えるべきだとし、新興宗教が競争心を上手に利用している点も考慮したらどうかという意見が出た。

実例として、百万遍唱題行を行なっているところで、唱題一部・十部・百部等の単位ごとに、経本・念珠・輪袈裟等の記念品や逆修法号を授与するという報告。成人式をする。敬老の日には会員の長者番付を作る。お話、紙芝居、映画、写経、写仏、年越しのお籠り、寒行、寒中ゴミ拾い（子供など）、毎回住職の話ばかりでなく、講師を招く、カラオケやゲーム・福引などの娯楽を盛り込む、等で変化をつけるという様な報告や提案があった。

特に団参や研修などを泊りがけですると、寺檀間や檀信徒同志の相互理解に有効、他寺院と合同の信行会など

も自分の寺を見直す良い機会になるという話も出ていた。又、レクリエーションも兼ねて、もつと気軽に毎年春と秋に日帰りて管区内の寺院を順番に訪ね、おいしい昼食をたべながら、その住職の話を聴くというやり方も紹介された。

運営面も、発足してある程度を経たら、檀徒の責任で何かをさせることが、檀徒としての自覚や寺への愛着を強め、さらに自発的な協力へと発展してゆくという話も出たが、長続きする会には、それなりの問題も出てきており、会費や葬儀の手伝等の収入金が、常連のメンバーの都合のよいように遣われたり、いつも年寄のみが出席して、嫁はいつでも留守番という様な事例も出てきており、それなりの規約作りや、年令・性別・立場などを考えて機会を設けることも必要とのことで、気力満々で実権を握る嫁たちが婦人会を占めてしまっているために、嫁にしいたげられている年寄りの会を作ったという発展例もあった。

人集めの呼びかけ等については、既存の万灯講や、婦

人会などの清掃奉仕等の社会活動が地域住民に対して寺や宗門の存在を印象づけており、ポスター・ビラ・ハガキ等の案内に対する反応を高めているという。

直接の呼びかけの方法として高い効果をあげているとして報告されたのは、婦人のくちコミによるものである。これは単なる伝達の手段以上に、教師や寺族の日常生活を含めた、寺や会の内情などの「評判」に係りしており、小さな事柄でも、プラスにもマイナスにも、強く、しかも潜在的に、寺院運営全般に影響を与えるものと思われるので、安定した効果をあげるためには、不断の努力と配慮が必要のようである。

会費については、有無・金額はまちまちであり、無料にしても参加者が多くなる訳でもないらしく、取るところでも、子供・青年・婦人・老人等多くの会を持つところでは、各家庭での合計額が多額になるなどの問題もあり、難かしいようである。結局、会員がこの位の額ならば……という線で見定めるか、何らかの喜捨をさせるというやり方がよいので

はないかという話になった。

名称については、信行会の外独自の名称のものもあつたが、「信行会」が堅苦しい名称と受け取られそうな場合などは、一般的な名称にしておいて、盛り上りを見てから改称するのも良いのではないかという意見が出た。

この外に注目すべき意見・報告を紹介すると、寺や宗門の行事・会合には、寺族、特に住職夫人が積極的に参加して、檀信徒と一緒に活動、聴聞すべきであるという意見。このことについては、寺院批判の文書の中にも指摘されてもおり（親鸞会発行『本願寺なぜ答えぬ』二〇九頁）、どこの家でも、育児・家事・家業で大変なのだから、そこを参加してもらうためにも、人手不足ではあつても実行しようということである。

檀信徒との交流においては、誕生・成人・結婚・敬老等の祝いの機会をとらえて、祝状や気の利いた品——実例としては造幣局で頒布している干支メダルの入っているコインセット（生まれ年の記念等）が参加者の熱い視線を集めていた——を贈り、さらにその品を基に説法をす

るなど、心のつながりを深め、寺や教師に親しみを持つてもらおう上で効果をあげている報告があった。

また、寺同志の協力が必要なときに、法縁等の派閥が障害になっており、これを解消すべきだとの意見も出て、様々な観点から考えてゆかなければならないようである。

以上、「だれにでもできる信行会づくり」のためにいろいろな意見報告がなされたが、要は「教師のやる気」にすべてがかかっているということである。「御遠忌の盛り上りを過ぎて、今、何をすべきかの焦点が定まっていないう教師が、いかにして信行会を中心にして目覚めてゆくかが問題である」という意見もあり、とにかく先ず、個々あるいは合同で、できるところから始めてゆくということが大切なのではないだろうか。

最後に、こうした教師の努力を助け、促すべく、宗門各機関においても、すぐ役に立つ情報・資料・教材の提供や、教師同志の情報交流ができる教化研究会議等の開催・援助をより進めてほしいとの強い要望が出された。

(常岡裕道)